

国際日本語キャンプ 2013

大谷つかさ、福永達士

1. はじめに

本稿は、2013年8月30日から9月2日にタイのチェンマイで開催された「国際日本語キャンプ 2013」について報告する。本キャンプは、タイ教育省基礎教育委員会の資金協力によって開催され、企画と実施については、主に、独立行政法人国際交流基金バンコク日本文化センターの日本語専門家が担当した。キャンプにはタイ、ベトナム、マレーシア、韓国、カンボジア、日本からあわせて200人以上の日本語学習者と日本語教師が参加した。3泊4日のキャンプ期間中には、「おみやげ」というテーマで、日本語、日本文化に関連する活動が企画・実施された。以下に、本キャンプのテーマと概略について述べる。

1.1 キャンプテーマ「おみやげ」

本キャンプでは、「おみやげ」というテーマで全4日間の活動を行った。キャンプ初日には、事前課題として課されていた各国・地域のお土産について参加者が日本語で発表した。2、3日目には、チェンマイのお土産づくり（伝統工芸品の傘、お菓子）を体験した。4日目には、最終タスクとして、参加者各自がキャンプ中に購入、あるいは作成したお土産について、日本語によるプレゼンテーションを行った。最終タスクについては、1日目に説明を行い、お土産のコンセプトやカテゴリーを日本語でグループ活動を通して学習した。また、日本語によるプレゼンテーションの仕方を学ぶワークショップが設けられた。全日程で、一貫したテーマで活動に取り組み、日本語学習、異文化体験をすることができるキャンプとなった。最終タスクの概要は表1の通り。

表1 最終タスク

タスク名：私はこんなおみやげを見つけました！

目 標：買ったおみやげについて、おみやげを見せながら説明することができる。

発表形式：グループごとのプレゼンテーション（各発表は個人）

審 査：全参加者（教師、学習者）と、チェンマイ在住の日本人日本語教師

1.2 キャンプ概略

主催：タイ教育省基礎教育委員会事務局（以下、OBEC）

協力：独立行政法人国際交流基金バンコク日本文化センター（以下、JFBKK）

Yupparaj Wittayalai School、Lampang Karayanee School

実施時期：2013年8月30日(金)～9月2日(火) 4日間（8月29日(木)と9月3日(水)は移動日）

実施会場及び、講師・参加者宿泊先：ロータス・パーンスアンケオホテル（チェンマイ県）
 参加国：タイ、マレーシア、カンボジア、ベトナム、韓国、日本（タイで勉強する高校生）
 参加者：日本語を学習している高校生（タイ：103名、タイ国外：43名）、日本語ネットワークセンター校の教師（28名）。尚、各国の参加生徒数及び引率教師数のバラつきの理由は以下の通り。

- ① タイ：タイ全土の各教育地区から参加。ただし、各教育地区に属する学校数の半分の数の生徒が参加可能（例えば、教育地区に18校ある場合の参加人数は9名）。引率教師数は、教育地区で参加する生徒数による。
- ② タイ国外：各国、最大人数6名で参加募集を出したが、参加希望がありながら事情により不参加になる国などがあつたため、当初の予定より人数が減ってしまった。そこで、参加希望のあつた5か国の参加生徒数は相談に応じて臨機応変に対応した。その結果、各国で人数のバラつきが出ている。引率教師数は、タイと同様に、参加生徒数を踏まえ安全面を考慮し、各国が決定した人数となっている。

参加条件：日本語能力試験 N5 以上または同程度の日本語能力を有する者。ただし、参加生徒の選抜は各学校に任せる。

表 2 参加者人数及び内訳

	タイ	韓国	カンボジア	ベトナム	日本	マレーシア	計
引率教師	44	2	2	3	1	3	55
参加生徒	103	7	7	15	6	8	146

目的：

(1) 日本語学習者

ア．自国及び自国以外の言葉や文化などについての学びを深めることができる。

イ．異文化・社会体験をすることができる。

ウ．自発的な考え、行動を促進することができる。

(2) 日本語教師

ア．キャンプのアイディアを得ることができる。

イ．国境を越えた日本語教師ネットワークを形成することができる。

講師：

Thirat Lomsri (Lampang Karayanee School)、大谷つかさ (国際交流基金日本語専門家)、福永達士 (国際交流基金日本語専門家)、伊藤愛子 (元国際交流基金日本語上級専門家) 他、活動内容アドバイザーとして Prapa Sangthongsuk (JEBKK 専任講師)、協力講師としてタイ人講師と日本人講師あわせて5名が参加した。

2. キャンプ概要

2.1 時間割 (しおりより抜粋)

表3 時間割

時間	1日目(8月30日)	2日目(8月31日)	3日目(9月1日)	4日目(9月2日)	
7:00-8:00	うけつけ	起きる・朝ごはん	起きる・朝ごはん	起きる・朝ごはん	
8:00-8:30	開会式	集合			
8:30-10:00	① アイスブレーキング ② オリエンテーション	チェンマイ市内見学 ↓ ドイ・ステープ ↓ 昼ごはん (ホテル) ↓ サンカンパーン ↓ ワロット市場	歌・ゲーム	発表の準備	
			アセアンクイズ		
10:00-10:15	休み時間		休み時間	休み時間	
10:15-12:00	★国のおみやげを 紹介しよう!		自己紹介活動	★見学地クイズ!	★おみやげについて
				① エコについて ② ふろしき紹介	みんなに話そう!
12:00-13:00	お昼ごはん		お昼ごはん	お昼ごはん	
13:00-14:30	★おみやげについて かんがえよう!			★おみやげを作ろう!	結果発表・ふりかえり
14:30-14:45	休み時間			・カオテンを作る ・パッケージに絵をかく ・パッケージをつつむ	休み時間
14:45-16:00	③ タスクの説明 ④ チェンマイの説明			★発表のしかたを 勉強しよう!	閉会式
16:00-17:00	連絡	レストランへ移動	連絡		
18:00-20:00	ばんごはん	連絡	ばんごはん	帰る	
20:00-21:00	自由時間	カントークデイナー	サンデーマーケット (自由時間)		
22:00-	寝る時間	寝る時間	寝る時間		

2.2 活動概略

1 日目：8 月 30 日（金）

(1) 開会式

概要：国際日本語キャンプ開催にあたって、関係者より挨拶。

(2) アイスブレイキング

概要：講師紹介を行った後、アイスブレイキングとして、「数字ゲーム」、「誕生日ライン」、「自己紹介活動」、「動物じゃんけん」などを実施した。

担当講師所感：各国参加者同士はもちろんのこと、タイ人生徒もお互いに初対面であり、当初は全員が緊張した面持ちであった。十分に時間を割いてアイスブレイキングを行ったことで、参加者間の緊張をときほぐし、コミュニケーションをとりやすい雰囲気になった。

(3) オリエンテーション

概要：オリエンテーションでは、様々な国の参加者がいることを意識させたうえで、キャンプ中のルールを説明した。ルールは参加者の日本語能力を考慮し、事前にビデオを作ったうえで、それを見せながら一つ一つ確認した。

担当講師所感：ビデオを用意したことで視覚的に理解することができたようで、効果はあったと思われる。参加した他国の教師からはビデオの内容がおもしろく、生徒がひきつけられていたのによかったという反応があった。

(4) 国のおみやげを紹介しよう！

概要：参加者には事前課題として、出身国・地域のお土産を紹介するタスクが課されていた。その課題に基づき、show & tell の形式で、出身国・地域ごとに日本語で発表が行われた。

担当講師所感：概ね発表は成功に終わった。しかし、どのような形式で、どのくらいの時間で発表するかがきちんと周知されておらず、参加者によって準備の度合いが異なった。

(5) 自己紹介活動

概要：今回のキャンプでは、日本語学習者が全 18 グループに分かれて活動することになっていた。また、タイと各国参加者の教師が、ファシリテーターとして各グループに入った。この時間にグループメンバーの初顔合わせを行った。

担当講師所感：自己紹介活動を通して、グループで活動していくことを理解し、コミュニケーションを取りやすい雰囲気づくりをすることができた。

(6) おみやげについてかんがえよう！

概要：4 日間のキャンプの中で共通の認識を持てるよう、お土産のカテゴリー、コンセプトを提示した。カテゴリーは「食べます、着ます、使います、飾ります」、コンセプトは「あ：愛情、い：いい関係、う：嬉しい、え：笑顔、お：思い出」である。ワークショップ形式で行うことで、日本語の発話の機会を多く取り入れ、考えられるよう工夫した。

担当講師所感：グループでの活動が多かったが、教師がファシリテーターを務めていたこともあり、どのグループも積極的に話す様子が見られた。ファシリテーターの協力によりスムーズに進めることができた。

(7) タスクの説明

概要：最終タスクについて、発表例と共に説明した（概要は表1を参照）。

担当講師所感：キャンプ初日に、最終タスクの説明を行うことで、今回のキャンプの活動目的を明確にすることができた。

(8) チェンマイの説明

概要：翌日行く観光地の説明と、どんなお土産が買えるかを示し、最終日の発表で使うお土産を買うときに困らないようにした。

2日目：8月31日（土）

(1) チェンマイ市内見学

概要：全18グループに分かれて、ミニバスに乗ってチェンマイ市内を見学した。見学先は、タイで有名なドイ・ステープ寺、伝統工芸品である傘づくりで有名なサンカンペーンで傘づくり体験、そして、ワロロット市場へショッピングに行き、最後は、タイダンスを鑑賞しながら伝統料理を食べるカントークディナーであった。

3日目：9月1日（日）

(1) 歌・ゲーム

概要：アルゴリズム行進を全体で行った。

(2) アセアンクイズ/見学地クイズ

概要：アセアンクイズでは、タイ人以外の生徒が活躍できる場を作るべく、その国の人に聞かなければ答えがわからないようなものをクイズにした。見学地クイズでは、前日に行った場所に関するクイズを行った。

担当講師所感：アセアンクイズは、タイ以外の生徒が積極的に話せる場ができたことと、日本、タイ以外の国について学ぶよい機会であったと思われる。見学地クイズは、クイズが続いたこともあり、少し疲れている印象を受けた。

(3) エコについて/ふろしき紹介

概要：エコについて少し触れた後、風呂敷の包み方の紹介、ひもを使ったパッケージの方法を紹介し、実際にやってみた。

(4) おみやげを作ろう！

概要：カオテンの材料や作り方などを簡単に説明した後、グループに分かれて簡単なお菓子作りの作業を行い、お菓子を入れるパッケージに自由に絵を描いて、オリジナルのお土産を作った。

(5) 発表の仕方を勉強しよう！

概要:最終タスクのプレゼンテーションの仕方について、いくつかの例を提示しながら確認した。その後、グループに分かれて、最終日の発表準備に行った。

4日目:9月2日(月)

(1) おみやげについてみんなに話そう!

概要:全18グループが、発表する側と発表を聞く側に交互に分かれて、プレゼンテーションを行った。発表後、全参加者と当日来場した日本人審査員によって、1~3位までと、審査員特別賞が選ばれた。

担当講師所感:審査は、個人に対してではなく、グループに対して行うとした。その目的は、参加者全員がタスクを達成するために、準備段階から参加者同士が協働することであった。実際に、グループ内の教師はファシリテーターとして、また生徒同士もお互いにサポートしたり、入念に練習したりした後で、発表に挑むことができた。

(2) 結果発表・ふりかえり

概要:上記活動の、結果発表を行った後、振り返り活動として、キャンプに対するアンケート調査を行った。

(3) 各国の発表、閉会式

概要:各国参加者による発表、修了書授与、記念写真撮影



図1:ワークショップ



図2:傘作り



図3:発表風景

2.3 教師ミーティング

本キャンプでは、キャンプ前日の8月29日から毎日活動後に教師だけのミーティングを行い、翌日の活動、活動開始時間の確認と、活動の目的等についての説明と話し合いを行った。前日のミーティングでは全体でキャンプの目的を確認し、教師の役割を示した。多国籍の生徒が大人数集まっていることから、教師全員の協力が必要不可欠であったため、共通の認識、目標を示せたことは4日間のキャンプを進めるうえで重要であったと思われる。また、初日のミーティングでは一緒にグループを担当する教師同士で自己紹介を行ったことで、キャンプでの活動がしやすかったという声も聞かれた。毎日、ファシリテーターとなる教師全員でミーティングを開き、それに沿って教師が行動していたことは大きなキャンプをするうえで重要であったと思われる。



図4 教師ミーティングの様子

3. 今回のキャンプ実施における成果と課題

3.1 成果

キャンプ最終日に参加生徒、教師にアンケートを行った。アンケートは、各活動及びキャンプ全体を4件法（とてもよかった、よかった、あまりよくなかった、よくなかった）で評価する選択式と、自由記述で構成されている。尚、自由記述での使用言語は記入者に任せ、母語で書かれたものは、後日、引率教師またはJFBKK専任講師が日本語に翻訳した。

生徒の自由記述の質問項目は、①いろいろな国の人とのグループはどうでしたか、②このキャンプにさんかしてよかったことは何ですか、③このキャンプでたいへんだったことは何ですか、という3点である。

タイ人生徒の記述を見ると、海外の生徒との交流により言葉や文化について知ることができた、交友関係が広がったという肯定的な意見が多い。しかし、「同じ国がたくさんいました。あまり好きじゃない」「もっと日本人がいたらいいと思う」など、タイ人生徒が多い環境を不満に思った生徒もいた。記述の抜粋は表4を参照されたい。

表4 生徒（タイ国内）のアンケート結果から（日本語原文ママ、あるいは母語からの翻訳）

- ・外国語の学習や文化交流ができた。新しい言葉を知った。とても気に入った。
- ・知識・意見交換ができた。
- ・新しい外国人のともだちや地方のともだちが増えた。
- ・タイ語を教えたり、外国語を教えてもらったりして楽しかった。
- ・最初は少し緊張していたが、アイスブレイクの活動をしたあと、仲が良くなって楽しくなった。
- ・みんながタイ語、英語、日本語をまぜて話そうとしていたからおもしろかった。
- ・日本語が共通語だと感じた。

タイ国外からの生徒からは、タイ人の生徒と同じく交友関係が広がったという声やいろいろな文化を知ることができたという声が聞かれ、帰るときにはどの国の生徒も「楽しかったからまた参

加したい」と口々に述べていた。しかし、アンケートを見ると「タイ人がタイ語ばかり話していた」という意見も多く、この点は今後の課題となるだろう。抜粋は表5を参照のこと。

表5 生徒（タイ国外）のアンケート結果から（日本語原文ママ、あるいは母語からの翻訳）

- ・外国人の友達と日本語で色々話せて楽しかったです。機会があればまた来たいです。
- ・一つ一つのグループに分かれて、とても面白かったです。グループの先生と学生は皆異国人同士で、皆アジアの仲間で楽しかったです。
- ・私のグループの人は皆親切で、よくお互い助け合いました。日本語があまり通じなくても相手に伝わるようによく頑張りました。
- ・素晴らしい経験で、他のいろいろな国の文化を知ることができてよかった。
- ・新しい友達を作り、他の多くの国について知る貴重な機会だった。お互い意思疎通が難しいときもあったが、それもよい思い出だ。
- ・初めは全然理解できなかったが、今は少しわかるようになった。
- ・私のグループにはタイ人とカンボジア人と韓国人がいて、がんばって日本語を使っていたが、タイの一部の人はタイ語で話していたので、私達にはわかりませんでした。
- ・タイの生徒がタイ語ばかりで話していたので、困った。

次に教師であるが、教師の記述項目は①キャンプに参加してよかったことは何ですか、②このキャンプで大変だったことは何ですか、という2点である。

表6 タイ国内（教師）のアンケート結果から（日本語原文ママ、あるいは母語からの翻訳）

- ・いろいろな国の生徒たちと先生たちに会ったことができ、とてもよかったと思います。そのキャンプが終わってもまたネットワークをしたいと思います。できれば、いろいろな日本語の先生たち（アジアの国の先生）のキャンプをやりたいです。
- ・ほかの国の人とアイデアがシェアできた。
- ・学生はよく日本語を使ったと思う。
- ・参加する学生が多いですから、活動が全員できないと思いましたが、全員できました。びっくりです。大好きです。
- ・**Network+Friendship** が作れました。
- ・キャンプの後で学生たちはいっしょけんめい日本語を勉強すると思います。

表7 タイ国外(教師)のアンケート結果から(日本語原文ママ、あるいは母語からの翻訳)

- ・普段は非常におとなしく、少人数の中で学習している生徒ですが、他国の生徒の中心となってサポートしていく姿を見ることができて嬉しく思います。
- ・違う国からの先生方は皆友好的で協力的であった。
- ・このキャンプで、全ての活動のやり方、コントロールの仕方が学べた。
- ・生徒は友だちと全部日本語で話していたのでとてもいいと思います。
- ・200人規模の国際キャンプがどのように成立するのか勉強させていただきました。様々な機材をフルに活用されていて素晴らしいと思いました。(中略) 高校生が外国に出る機会はなかなかないので、よい企画だと思いました。
- ・キャンプに関する情報が少なかったので、生徒や保護者への伝達に不備があったと思います。
- ・教師間の交流を深める時間がなく残念でした。

教師からの反応は、国内、国外ともに、生徒の日本語能力に関するものと、自身が得たものに関する肯定的な記述が多く、教師自身も学びがあったと思われる。しかし、国外の教師の反応にあるように、教師間での交流時間が少なかった点や、連絡に不備があった点は反省点と言える。

3.2 今後の国際日本語キャンプ実施に向けて

本稿の最後に、前項のアンケート結果をふまえた上で、今回のキャンプの課題について述べる。なお、紙幅の都合上、主に参加した生徒に焦点をあてて述べることにする。主な課題は、次の5点である。

3.2.1 参加者構成のバランス

キャンプ概略でも述べたが、今回の参加者は圧倒的多数がタイ人生徒であった。そのため、アンケートにあるように、グループによっては、他国の生徒たちとの交流が少ないケースが多々あった。異文化体験がキャンプでの主な目的の一つであるならば、適正な参加者構成を考える必要がある。

3.2.2 参加者に求められる日本語能力

本キャンプに参加する条件として、「日本語能力試験 N5 以上または同程度の日本語能力を有する者」とした。タイ以外の参加者は、そのレベルを概ねクリアしているように見受けられた。一方で、タイ人生徒の中には、日本語能力が低いためになかなか活動の輪に入れなかったり、タイ語使用が中心になってしまったりしているような生徒も見受けられた。事前に、どのような活動が行なわれ、どのような日本語能力が必要とされるかを周知徹底することで、より参加者間の日本語使用を促進することができるかもしれない。

3.2.3 日本語使用を促進させるタスク設定

今回の国際キャンプは、「おみやげ」というテーマのもとに、4日間の活動を行った。最終タス

クである「私はこんなおみやげを見つけました！」での発表に向けて「おみやげ」という一貫したテーマで活動を行うことができたと言える。「国のおみやげを紹介しよう！」や「自己紹介活動」（ともに1日目）、また最終タスクの参加者による発表（4日目）では、講師側が意図したとおりに、参加者間の日本語使用が確認された。一方で、2、3日目の活動は、アンケート結果や報告者の観察とその後の報告者間の振り返り活動でも、必ずしも日本語使用が多いとは言えなかった。日本語使用が認められた活動でも、日本語を一方的に「産出する」場面が主であり、参加者間の日本語による「やりとり」を行う場面はやや限定的であった。様々な国の学習者が参加しているという国際キャンプの特性を生かし、お互いの国のことを話すといったやりとりするような場を設けたり、そういったやりとりを通して、グループで一つのものを作り上げていくといった活動を行ったり、あるいはグループ・ダイナミクスが生じる可能性を含んだ活動も今後考えたい。

3.2.4 目標の明確化と提示

今回の国際日本語キャンプはアセアン諸国からの様々な参加者がいた。学習者の目的は1.2で述べた通り、日本語を運用することだけではなく、異文化理解、異文化体験をすることでもあった。「日本語運用の場」ということはよく理解していたと思うが、「異文化理解の場」としても捉えられた学習者は少なかったのではないだろうか。その結果が、タイ国内参加者によるタイ語使用の過多という問題を生んでしまったように思われる。タイ国外からの参加者の場合、異国へ来るという時点である程度意識できるだろうが、国内の参加者に対しては「国外からの参加者がくるというのはどういうことか」、「どのような態度で臨むべきか」を事前に心構えとして考えさせることで、異文化を持つ相手との相互理解が促進できたかもしれない。

タスクの最終目標だけでなく、このキャンプの目標も明確化し、事前に提示しておくことで、お互いの言語や文化に興味を抱き、異文化理解が促進されるのではないだろうか。また、目標を先に把握させておくことで、実施後に自分の到達度を測ることができると思う。

3.2.5 活動外での交流の促進

3日目の夜に自由時間があり、その時間にサンデーマーケットへと出かける生徒が多くいた。様子を見ていると、同じ国同士ではなく、グループの友達と来ている生徒も多くおり、活動外でも行動を共にしているケースもあった。このような様子から、活動外での交流も促進できればさらによかったのではないかと感じた。4日間のキャンプであるという利点を生かし、食事をグループで摂ったり、もしくはグループを離れて他のメンバーと摂ったりするなどしてもよかったかもしれない。

キャンプ後に Facebook にてグループを作り、写真をアップロードしたり、コメントのやり取りをしたりするなど交流を継続しているが、期間中の活動外にももっと参加者同士が関わる機会を作ることでさらに交流が促進されたに違いない。